

## 「慰霊の日」に命について考える

### 欲望と憎しみ渦巻く世に

昨年は小さな庭ではあるが鉢植えに1本の「ゴーヤー」の苗を植えてみた。一日一日の成長と実を結ぶゴーヤーの個性ある形に、日常の惰性から解放された。台風でもって終焉を迎えたが、一夏の涼を十分に味わうことができた。

欲がでた。今年は苗を2本にした。1本はスクスクと育ったが、どうも片方の1本が痩せ細っていく。肥料を追加してみたが効果が現れない。よくよく観察してみると、カタツムリの格好の餌になっている。農業を楽しんでいる友人に助けを求めた。てきめん効くカタツムリ退治の農薬を分けてもらった。

すざまじいの一言。カタツムリの死骸の山である。鉢の中だけではなく、庭の敷カ所に農薬を撒いたがため、両手に余るほどの死骸である。あまりの残忍さに、我に返った。一人の人間のささやかな欲望のために、これほどまでにカタツムリに犠牲を強いていいのだろうか。生活がかかっている訳でもない。小さな人間の、ささやかな欲望とその犠牲の大きさ。おいしそうに緑の葉をきざんでいく小さなカタツムリが愛おしくなった。

飽食の時代である。多くの生き物を「殺して」しか生きられない人間の本性に思いを馳せた。動物、植物だけではない。人が人を、親が子を、子が親を殺す。虐待。いじめ。保険金殺人。死刑を願って、通りがかりの罪のない人間をも刺して生きる事件もある。「欲望」を満たすため。

ましてや戦争である。憎しみの渦巻く世界がある。自らとその仲間、宗派、部族、民族の生存をかけて、容赦なく過酷な殺りくの場面をを繰り返す。生きるためにとの大義名分をかざしての軍備の増強による威嚇、核開発競争がある。生きるために殺す。殺すための準備、殺されないがための備えにと惜しみなく費やされる軍事費。抑止力と称して。

今年も、慰霊の日が近づく。「無念の死」に対比して、自らの「生」を思う。沖縄県の男性の平均寿命から割り出してみた。楽観的にみて、余すところ約15年。時間の配分を計画してみた。これまでの仕事を生かして1/3、学ぶことのできなかつた新たな分野に1/3、これまでの罪滅ぼしの奉仕活動に1/3。机上での、甘い考えである。残念ながら、どう考えてみても時間は足りない。全てを恩返し「時」にしないと。

「生きるために殺す」。悩み抜いた先人は、この矛盾のしがらみのことを、人間の業（ごう）、原罪（げんざい）等と称したのであろうか。